

IV. ユニット研究会

ユニット1（南アジア地域班）研究会

2013年度 第1回 ユニット1（南アジア地域班）研究会：第1回ワークショップ
"Ontology of Asian Philosophy: Perspectives from Buddhist Study and Analytic Philosophy"

■開催日時：2013年4月13日（土）、14日（日）10:00～18:00

■場所：龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室

■報告者・報告題目：

報告1：Shoryu Katsura (桂紹隆, Ryukoku University, Japan)

“What exists in Buddhist Philosophy?: From Abhidharma to Dharmakīrti”

報告2：Mark Siderits (Illinois State University, U.S.A)

“Abhidharma Ontology and its Defense”

報告3：Jay Garfield (Smith College, U.S.A)

“I am a Brain in a Vat (or perhaps a pile of sticks by the side of the road) ”

報告4：Tom Tillemans (University of Lausanne, Switzerland)

“Serious, Lightweight or Neither? ”

報告5：Hideyo Ogawa (小川英世, Hiroshima University, Japan)

“Existence and Meaning: Indian Grammarians’ approach to ‘existence’ ”

報告6：Kai-Yuan Cheng (鄭凱元, Institute of Philosophy of Mind and Cognition, National Yang-Ming University, Taiwan)

“Self and Body in the Zhuangzi”

報告7：Chen-kuo Lin (林鎮國, National Chengchi University, Taiwan)

“How to meditate with the knowledge of particulars and universals for attaining enlightenment?: Huizhao on svalakṣaṇa and sāmānyalakṣaṇa”

報告8：Yasuo Deguchi (出口康夫, Kyoto University, Japan)

“Constructing Logic of Emptiness: Nishitani, Jizang, and Para-consistency”

報告9：Ricki Bliss (Kyoto University, Japan)

“Metaphysical Anti-Foundationalism: Viciousness and the Structure of Reality”

報告10：Takashi Yagisawa (八木沢敬, California State University, Northridge, U.S.A)

“Deflationary Existence and Inflationary Existents”

■参加者：21人（13日）、17人（14日）

■共催：JSPS Grant-in-Aid Research Group Darshana; Center for Applied Philosophy and Ethics, Graduate School of Letters, Kyoto University

【報告のポイント】

アジアの哲学における存在論に関して分析哲学者と仏教学者とがそれぞれの意見を提示し、それをもとに議論を交わして相互に問題意識を共有した。西洋哲学を専門とする科学哲学者と、文献学が主流の仏教学者とが方法論上の相違を乗り越えて、共に研究を進めうる可能性が示された。

【報告の概要】

最初の発表者として BARC センター長・桂は、仏教思想体系の一つであり、法 (dharma) の実有性を主張したアビダルマ教義を検討し、その体系において示されている仮有や実有などの存在の区別を提示した。さらに、7 世紀インドの代表的な仏教哲学者であるダルマキールティの「結果を生じる作用を為すこと」という存在の定義を取り上げ、仏教における存在論の一端を紹介した。

Siderits は、アビダルマの存在論において、存在するものの本質とされる自性 (svabhāva) に焦点をあて、その概念の輪郭を明らかにした。さらに、無自性空を掲げる中観派が、自性に関してどのように批判したのかを検討した。

Garfield は、5 世紀インドの仏教思想家・世親の『三性論』における象の喩えを取り上げ、存在論的な角度からではなく、現象学の視点から世親の三性説を検討した。その際に、Hilary Putnam の水槽の脳と呼ばれる思考実験との対比が行われた。

Tillemans は、仏教思想において展開された存在論的な議論の中で、龍樹に始まる中観派がいかに静寂主義 (quietism) の態度を貫いたのかを検討し、インド仏教からチベット仏教に至るまで展開された中観思想の特色を提示した。

小川は、以上の仏教側からのアプローチとは別に、インド古典文法学の立場から存在論を検討した。五世紀のインドで活躍したバルトリハリの言語哲学において、ことばとその指示対象がどう考えられ、また、存在をどのように言語的に表現するのかが紹介された。

Cheng は、紀元前に中国で活躍した荘子の自我 (self) についての見解を紹介し、自我と身体 (body) に関するアイディアを検討した。また、荘子の思想と、今日の認知科学などとの比較が行われた。

Lin は、中国仏教思想において法相教学を大成した窺基 (632-682) の陰に隠れて、未だ十分にその思想が解明されていない慧沼 (648-714) を取り上げ、彼の存在論を検討した。特に、『二量章』などの彼の著作から、特殊と普遍にそれぞれ相当する自相と共相に関して議論が深められた。

出口は、西谷啓治 (1900-1990) が構築に挑んだ空の論理 (the logic of emptiness) を取り上げ、中国仏教において三論教学を大成した吉蔵 (549-623) の哲学と、現代の矛盾許容論理 (para-consistent logic) との比較においてそれを再検討した。

Bliss は、形而上学的反基礎付け主義 (metaphysical anti-foundationalism) を、vicious をキ

ーワードとして考察し、その上で、存在論に関する見解を披露した。

八木沢は最初に、存在を意味する語を取り上げてそれぞれの性格を分析し、その上で存在とは何かという問題について、分析哲学の立場から考察を深めた。その際に、インフレーションとデフレーションという概念を用いて説明がなされた。

【議論の概要】

議論はそれぞれの報告ごとに行われ、フロアも巻き込み活発に意見が交わされた。方法論上の相違から議論が錯綜する場面がしばしば見られたが、それぞれの分野内だけでは発想されないアイデアが互に提示された。今後も継続してこのようなワークショップを試みることで合意が得られた。



2013 年度 第 2 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目： 宗教的寛容と共存の可能性：タイ国南部の現状を中心として
- 開催日時：2013 年 7 月 2 日（火）15:00～16:30
- 場所： 龍谷大学大宮学舎北翼 204 教室
- 報告者： K. プラボンサック（龍谷大学非常勤講師，2012 年度 BARC 公募研究員）
- ファシリテーター： 岡本健資（龍谷大学政策学部講師）
- コメンテーター： 若原雄昭（龍谷大学文学部教授）
- 参加者： 51 人

【報告のポイント】

2012 年度 BARC 公募研究の成果として、タイ国内における仏教徒とイスラーム教徒の概説に続き、タイ南部における両宗教徒の対立が続く現状について、最新の現地調査に基づ

く報告がなされた。

【報告の概要】

現在、タイ全土における宗教人口の割合は、仏教徒が 90 パーセント、イスラーム教徒は 5 パーセントである。しかし、タイ南部 4 県に限れば、イスラーム教徒が 70 パーセント、仏教徒は 30 パーセントとなり、多数派と少数派が逆転する。報告者はタイ南部に入って調査を行い、当該地域が仏教国として知られている一般的なタイのイメージとは異なった様相を呈していたことを報告した。

近年、タイ南部ではイスラーム教徒と仏教徒とが宗教的・民族的対立を深めており、大きな社会問題となりつつある。今回の調査地域は、タイ南部 4 県すなわち Songkhla, Pattani, Yala, Narathiwat を予定していた。しかし、Narathiwat は予想以上に危険な地域と判断されたため、調査対象から除外せざるを得なかった。また、イスラーム教徒が大半を占める Pattani では資料映像の撮影も報告者自身によって実施することが困難な状況であったため、現地協力者へ依頼することとなった。

報告者は、タイ国での仏教徒とイスラーム教徒との対立に関する平和的解決と共存の可能性を模索するため、下記の調査及び研究が実施されたことを報告した。

- a. タイ南部で深刻な社会問題となっているイスラーム教徒と仏教徒との宗教的・民族的対立の背景の調査
- b. タイ国南部の現地調査
- c. 宗教的・民族的対立の平和的解決の方途の探求

まず、上記項目 a においては、近年タイ南部においてイスラーム教徒と仏教徒の対立が深刻化するに至った経緯とその歴史的・政治的背景を検討し、その原因が一つではないことを明らかにした。例えば、1923 年に実施された、正式なタイ語を教えていない学校の閉鎖などが、両者の対立が始まった原因の一つとして挙げられ、対立は近年に始まったものではないことが指摘された。また、対立が急増したのは、2001～2005 年であり、タクシン政権が南部国境県行政調整センター (Southern Border Provinces Administration Centre : SBPAC) を閉鎖したことなども原因である可能性が高いことが指摘された。そして、2004 年には、仏教徒とイスラーム教徒との衝突の影響が、学校や寺院、公務員や僧侶にも及ぶようになったという。2004 年 1 月 1 日～2013 年 4 月 30 日の被害者数もほぼ判明している。タイ王国国内治安維持部隊 (Internal Security Operations Command : ISOC) からの情報では、死者数は 5,105 人、負傷者数は 9,372 人であり、この内、両宗教徒が占める割合はほぼ等しいものであった。

項目 b においては、報告者が現地入りし住民へのアンケートとインタビューによる調査を行った (2013 年 2 月 15 日～3 月 15 日)。調査にあたり、安全上の配慮から軍の兵士が随

行する場合もあったことや、映像資料に含まれていた廃墟と化した村々と真新しい爆発の跡は、当該地域の緊迫した状況を伝えていた。

項目 a 並びに b を踏まえて、報告者は c について、宗教的・民族的対立の平和的解決と共存の可能性を指摘した。まず、対立の解消に向けて、仏教徒側から一層の働きかけをすることの必要性が指摘された。その理由は、対立の根本的な原因が、実際は、両宗教の教理上の相違や矛盾というより、世俗的権利や利益と関わるためである。この問題を解決するためには、タイ国の多数派である仏教徒からの働きかけが必要不可欠である。宗教を軸として単純化された対立のイメージを、両宗教の指導者が協力して払拭を試みることによって、根本的問題を解決する道に就くべきであるとの提言がなされた。

【議論の概要】

若原氏からは、タイの現状を憂慮するコメントが寄せられた。また、同氏は、報告者が現地調査と研究を通して、問題の根本が宗教対立という単純な図式ではなく、世俗的問題と結びついていることを指摘した点を支持し、共存の可能性を探る試みとして、多数派と少数派の宗教指導者たちの協力について期待を示した。

また、タイ国とは逆に、イスラーム教徒が多数派を占め、仏教徒が少数派であるバング



ラデシュから来日し報告に臨席していた D. K. バルア氏（バングラデシュ国立ダッカ大学パーリ学仏教学科教授）は、教育に関して、タイの子供を仏教徒やイスラーム教徒として育てるのではなく、タイ人として育てなければならないとコメントし、子供の教育において偏った思想を教えることが対立を生み出すことにつながるとの指摘がなされた。



2013 年度 第 3 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目：アショーカ王のダルマと仏教
- 開催日時：2013 年 7 月 6 日（土）14:00～15:30
- 場所：龍谷大学大宮学舎清風 3 階共同研究室 1
- 報告者：岡本健資（龍谷大学政策学部講師）
- ファシリテーター：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授，BARC センター長）
- コメンテーター：若原雄昭（龍谷大学文学部教授）
- 参加者：17 人

【報告のポイント】

紀元前 3 世紀インドにおいて広大な領域を支配したマウリヤ朝の王アショーカの統治方法に関して、主に法／ダルマという語を中心に考察がなされ、彼が宗教に対してどのような考えを持っていたのかが示された。

【報告の概要】

宗教的側面において多様性を保持しつつ、文化的な統一を保持し続けているインドについて語る場合、しばしば紀元前 3 世紀のマウリヤ朝の王アショーカに焦点が当てられる。その理由は、アショーカは史上初めてインド亜大陸の殆どを支配域とした王であり、その支配が多様性を排除するものではなかったとされるからである。そのアショーカの政策については、すでに多くの研究が存在するが、アショーカの言及する法／ダルマについては未解明な部分もある。本報告では、アショーカ王が建立したとされる碑文（アショーカ法勅）に見られるダルマを検討し、彼の目指したダルマによる統治について考察がなされた。

アショーカ碑文の一つであるルンミンデーイー法勅の記述などから、アショーカが仏教に傾倒していた可能性が指摘されており、アショーカ法勅のダルマを仏法と同一視する研究者も存在する。しかし、ダルマは「生活規定、規範、法律、法則、宗教、慣習、制度、義務、正義」など広狭さまざまな意味を持つ語であり、アショーカ法勅の内でダルマ（法）が確実に「ブッダの教法」の意味で用いられているのは、「仏・法・僧」「正法」「法門」という 3 つの語における場合のみであるという。それ以外の法勅において、アショーカが官吏や民衆に遵守を呼びかけるダルマは、仏教という一宗教を超えた普遍的社会倫理であると推測される。

ダルマは、アショーカが採用した統治理念である。アショーカがダルマの下に重視したのは、不殺生や父母に対する従順を始めとする徳目であり、これらは今日で言うところの社会倫理に他ならない。実際にこれらの徳目はアショーカ法勅の中で、「古くからの慣行」と呼ばれ、身分、階級、宗教、民族などの枠を超えて人々が遵守すべきものとされている。

アショーカはマウリヤ王朝を父から譲り受け、広大な版図を統治するために、当時の諸宗教、主にバラモン教、ジャイナ教、仏教いずれの教えにも偏重せず、より普遍的な性格を持つ規範を定めることに努めたことで知られている。そして、アショーカはその普遍的規範をダルマと呼んだ。つまり、アショーカのダルマは、バラモン教、ジャイナ教、仏教のいずれのものでもなく、換言すると、どの宗教の教義とも部分的に合致する点に特徴があると言えよう。

また、アショーカ碑文には、宗教的寛容性を見いだすことができる。思想信条の異なったそれぞれの集団に対して、相互に認め合うことを呼びかけ、和合を善としたことは、支配域内の宗教的多様性を可能とする手法の提示に他ならない。アショーカの統治は、ダルマを枠組みとして異質な集団を包み込む試みであったと見ることができよう。

【議論の概要】

若原氏からは、アショーカ碑文を扱う上で、その時代に仏教聖典が文字化されていたのかを考慮する必要があるとのコメントがなされた。また桂氏からは、アショーカ碑文の内容を再考する必要性が指摘され、特にこれまで「宗派」と訳されてきた *pāsaṃḍa* に関して、今日で言うところの「宗派」なるものがその当時に存在していたのかも含めて検討し直さなければならないとコメントされた。



2013 年度 第 4 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目： A Preliminary Report on Dalit People in Bangladesh
(バングラデシュの被抑圧民に関する中間報告)
- 開催日時：2013 年 7 月 11 日（木）15:00～16:30
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者：ディリップ・クマル・バルア
(バングラデシュ国立ダッカ大学パーリ学仏教学科教授・前同学科長)
- ファシリテーター：若原雄昭（龍谷大学文学部教授）
- コメンテーター：岡本健資（龍谷大学政策学部講師）
- 参加者：15 人
- 共催：龍谷大学現代インド研究センター（RINDAS）

【報告のポイント】

2010 年から報告者は、Ms. Joyshri Sarkar の協力を得て、バングラデシュにおけるダリット（Dalit, 被抑圧民）の実態調査を実施しており、今回の報告ではその成果の一部が公表され、同国のダリットの歴史的背景が検証された。

【報告の概要】

バングラデシュのダリットが生活する地域はスラムに集中しており、衛生的にも劣悪で、何より、ダリットたちが調査に対して非協力的であるため、その取材や調査は困難を極める。現在多くの国々の NGO などが生活環境の改善を目指して活動しているが、大きな効果が見られないのが現状である。

バングラデシュのダリットは、イギリス統治時代の 18 世紀に、都市の建設やインフラ整備の労働力として、パンジャブ、ラージャスタン、ウッタル・プラデーシュなどのインド各地から集められた。当時の彼らは飢餓に苦しんでいたが、イギリス政府から生活の保障を約束されて、ベンガル地方に集められた。多くは、そのまま独立後のバングラデシュに残った。

バングラデシュのダリットは、1991 年の国勢調査で初めて一つのカテゴリーとしてグループ化された。この 1991 年の統計では、ダリットとして 1132 人が挙げられているが、これは現実的な数ではない。ダリットの組織である Harijan Aikya Parisad（ハリジャン連盟）によれば、バングラデシュ国内のダリットの人口は約 300 万人、ダッカ市内だけでも 2 万 2 千人が居住している。しかし、150 万人程度であるとの報告もあり、正確な数は把握できていないのが現状である。

彼らの生活に関する特徴は次の通りである：衣類に関しては、男性はシャツやルンギーを基本とし、女性はサリーを着用している。特に女性は、腕や耳などに多くの金属製品を中心としたアクセサリーを好んでつけている。食事については一般的に魚、鳥肉、山羊肉、野菜などを食べるが、特に、バングラデシュで大多数を占めるイスラム教徒が食べない豚肉を好んで食べることが特徴的である。イスラム教徒が禁じている飲酒も毎日行い、収入の大部分を酒代に消費していると言われている。住居に関しては、政府がダリットのために土地を提供している。増え続ける人口に対して供給される住居が少ないため、飽和状態であり、スラム化していることが多い。バングラデシュには義務教育制度があるが、差別や経済的な理由でダリットの子供が一般の学校に通うことは稀である。貧困のため児童就労が横行しており、ダリットの間では満足な学校教育が行われていないのが実状である。彼らの信仰に関しては、差別によりヒンドゥー教の寺院に入ることが出来ないので、独自の礼拝所をつくり、カーリー、ドゥルガー、クリシュナ、マナサーなどの神々へのプージャーを行っている。近年では、ヒンドゥー教からキリスト教またはイスラム教へと改宗が進んでいる。

最後に、バングラデシュのダリットたちが直面している問題として次の 5 点が挙げられた。

1. ダリットたちは主に清掃業を受け持って来たが、近代化と他の宗教グループからの業界参入によって、その市場も奪われ、より貧困化が加速している。
2. 飲酒、しかも劣悪な質の酒類を多量に飲む習慣が広まっており、貧しい食生活とあいま

って、健康を害う要因となっている。

3. 十分な教育が受けられず、児童就労も一般化しているので、貧困が貧困を生む負のスパイラルが生まれている。

4. 職業教育が行われていないため、他の職業に就けない。

5. 根強い差別を受けるなど基本的人権が無視されており、劣悪な環境や不衛生状態が続いている。

【議論の概要】

岡本氏からは、インドから移住する以前に、バングラデシュにはダリットは存在しなかったのかという質問がなされ、報告者からは、その通りであり、ダリット自身も、イギリス領インド時代にインドから連れてこられたと思っているとの回答がなされた。また同氏



から、ダリットたちの間でキリスト教などへの改宗が進んでいる理由が問われ、報告者からは、現地で活動する NGO などの多くがキリスト教系であり、彼らが布教活動を進めているのが改宗の要因であるとの返答がなされた。また若原氏からは、未解明の部分が多いバングラデシュのダリットの調査を続けてほしいとの期待が寄せられた。



2013 年度 第 5 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目：生き神クマリ信仰から見るネパール仏教
- 開催日時：2013 年 7 月 18 日（木）13:15～14:45
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者：スダン・シャキヤ（種智院大学専任講師，2012 年度 BARC 公募研究員）
- ファシリテーター：岡本健資（龍谷大学政策学部講師）
- コメンテーター：若原雄昭（龍谷大学文学部教授）
- 参加者：61 人

【報告のポイント】

1984 年から 1991 年までカトマンドゥでロイヤル・クマリを務めたラシュミラー・シャキヤ（Rashmila Shakya）氏からの聞き取り調査に基づき、ネパールで信仰を集める生き神クマ

リの実態が報告され、またその歴史的背景が検討された。

【報告の概要】

ネパールにおいて生き神として信仰されるクマリ (kumārī) は、ヒンドゥー教徒にはドゥルガー、タレージュ女尊の化身として、仏教徒にはヴァスダーラー・デーヴィー、ターラー女尊として崇拝されている。クマリは、ネパールの人々にとっての護国神、守護神、救済者であり、無病息災などの様々な現世利益を与える存在として信仰されている。クマリを崇拝する者にとって、クマリを目の当たりにすることは神そのものと対面することを意味し、それによってクマリの身体に宿る聖なる存在を実際に見ることが可能となる。ネパールの社会においてクマリの存在は極めて重要な意味を持つため、ネパール社会全体が生き神クマリとなった少女を、崇拝しながら大切に育てている。

現在カトマンドゥ盆地では、10名の少女が生き神クマリとして崇拝されている。その中でも、カトマンドゥ市のヴァサンプールのクマリ・チェンで暮らすクマリは「ロイヤル・クマリ」と呼ばれ、国家元首も参拝に訪れる。その他の地域に住むクマリは「ローカル・クマリ」と言われ、その土地の祭りなどにおいて重要な役割を果たしている。

クマリは、厳格な条件の下で選ばれる。生き神となる少女は、家柄良く、内面的にも外面的にも美しく、そして丈夫であることが理想とされている。例えばロイヤル・クマリとなるためには、仏教徒家系のシャキヤ (Shakya) 家系に生まれた3,4歳の少女であること、斜視ではなく歯が揃っていること、怪我がなく身体に痣などが無いこと、心身ともに丈夫であり如何なる恐怖にも耐えうることなどの条件を満たしていなければならない。また、国家元首と相性が合うこともその条件とされる。条件を満たした少女は、政府認定の選定委員会によって公的に承認された上で、様々な宗教儀礼を経て「生き神クマリ」となる。

クマリは、生きた神として毎日供養 (pūjā) を受ける。赤く塗られた額の中央に第三の眼を持つ彼女は、常に赤い衣服を身に着け、朝、定められた座につき、ヒンドゥー教と仏教の司祭がそれぞれの修法で供養を行い、一般の参拝者からの供物も受ける。クマリの身体は神の宿る場であり、人間の社会にいらながらも神秘的な存在でありつづける者として人々の信仰を日々集めている。クマリとしての役割を果たさなければならない時間以外は、普通の子供と同様に勉強したり遊んだりして日常を暮らしている。クマリは、初潮を迎えるとその任務を終え、人間としての生活に戻る。ただし、クマリの任務を終えてもなお神を宿す性質を持続することができるため、生き神のまま生活をする者もいる。実際に現在でもパタン市において、地域の現役のクマリと元クマリとが、生き神として崇拝の対象となっている。

女尊クマリの起源はヒンドゥー教文献と仏教文献双方に求めることができる。前者に関しては7世紀頃の『女尊の素晴らしさ (Devīmahātmya)』が挙げられ、この聖典をもってヒンドゥー教の女尊崇拝の歴史が始まるとされている。そこには数々の生き血を好む女尊が登場し、神々の敵、人間の敵である魔神を調伏する物語が記されている。そこで描かれる

ドゥルガー女尊やカーリー女尊こそが、ネパールの生き神クマリに宿るものであり、実際に今でも秋の祭りに動物や鳥類の生血を捧げられているのである。仏教においてクマリ女尊に対する崇拝は遅くとも 12 世紀に成立した『クリヤーサングラハ (Kriyāsāṃgraha)』に遡ることができる。この中にクマリ供養についての言及があり、密教僧／阿闍梨がその土地の吉凶を占うための請願をする相手としてクマリ女尊が登場している。

このようにヒンドゥー教と仏教とで異なった起源を持つクマリが「生き神」として信仰されるようになったのは、「ある伝説」に基づいている。その伝説には様々なバージョンがあるが、いずれにおいても登場人物が王、タレージュ女尊、シャーキャ家系の処女の三者であることは共通している。

王は呪術力を備えていた。それを使ってタレージュ女尊と毎日さいころゲームを楽しんでいた。女尊は、王が直接見ることができないようにカーテン一枚を隔てていた。ある日、王がカーテンの向こうの女尊の本当の姿を見ようとするが、それを察知した女尊はすぐに姿を消す。そして、王に対して女尊は次のように告げた。「私はもう二度とあなたの宮殿には行かない。今後は、シャーキャ家系の処女の身体の中に現れるから、私を崇拝したければシャーキャ家系の処女を神とみなしなさい」。

生き神クマリを供養した記録としては、11 世紀のラクシュミーバルマン王がパタン市に来てシャーキャ家系の少女をクマリとして供養し、寺院を建立したというエピソードが伝わっている。これに従えばネパールの生き神信仰は 11 世紀には始まっていたことになりそうだが、実際に「生き神クマリ」がネパールに登場した時期は明らかではなく、今後更に史料を調査する必要がある。

【議論の概要】

若原氏からは、ネパールの政治的状況によりロイヤル・クマリの存続が危ういのではないかと質問がなされ、報告者からは実際にクマリ制度廃止の動きもあるが、文化的側面



から存続できる可能性があるとの回答がなされた。また若原氏からは、祭りの際にクマリが乗る山車と、京都の祇園祭の山鉾との類似点が指摘され、報告者からも、釘を使わず縄で組むなどの作成方法が極めて似ており、また、その山車が街全体を巡るという点でも類似性が見られると指摘がなされた。



2013 年度 第 6 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目：南インド農村における下層民の地位向上と仏教復興運動：50 年間の参加型調査を振り返って
- 開催日時：2013 年 10 月 3 日（木）13:15～14:45
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者：中村尚司（龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー，特定非営利活動法人 JIPPO（十方）専務理事）
- ファシリテーター：岡本健資（龍谷大学政策学部講師）
- コメンテーター：若原雄昭（龍谷大学文学部教授）
- 参加者：40 人

【報告のポイント】

報告者が長年携わってきた「参加型調査」の成果の一端が提示された。アビニマンガラムという南インドの農村において，地位の低い人々がいかに地位向上に取り組んだのかが明らかにされ，また当地の仏教復興に関する報告もなされた。

【報告の概要】

まず，報告者がアジア経済研究所に在籍中の 1960 年代前半に，大内力（経済学），福武直（社会学）および中根千枝（文化人類学）によるインド農村に関する調査報告に接し，また，インドとスリランカについて農村経済に関する文献目録を作成するなどの準備作業を行ったことが披瀝された。1963～4 年には，新潟県西蒲原郡月潟村に住み込んで実態調査を行った。これが最初の参加型調査となった。1965 年 8 月，アジア経済研究所の海外派遣員として農村経済調査を目的に出国し，調査地としてマディヤプラデシュ州カンドゥワ県農村を選ぶ。同年 9 月にインド・パキスタン戦争が勃発し，スパイの誤認逮捕を受けるなどの困難を乗り越え，スリランカに移り，ウヴァ州の茶園調査を行い，労働者の出身農村などを調査した。

本報告で紹介された調査地であるアビニマンガラムは，浅層地下水利用（井戸灌漑）の農村であり，水稻・雑穀・畜産・農産物加工が営まれ，マレーシアとスリランカへの出稼ぎも行われている。多くのカーストが混在し，「ヴェラーラ」と呼ばれるシュードラとスケジュールド・カースト（あるいはスケジュールド・トライブ）とが対立している。アビニマンガラム村の独自性としては，19 世紀末よりマレー半島とセイロンに出稼ぎに出ていること，日本軍によるマレー占領行政下で資産を形成したことなどが挙げられ，また，帰村労働者が不可触民教育に取り組み，ガンディーの運動に共鳴しネルー小学校が設立されていることも指摘された。

21 世紀になると，アビニマンガラムにおける村落内人口は増加し，また職種が多様化し

た。出稼ぎも USA, UK, カナダ, 湾岸諸国, モルディヴなどに多角化している。農業労働者の日給は男 150 ルピー／女 100 ルピーであり, 住み込み労働だと月額 4 千ルピー, 大学の情報学科を卒業すると月収 1 万 5 千ルピー, 大学教員だと月収 2 万ルピーとなる。また消費生活にも変貌が見られ, ゴーバル・ガスが衰退し代わって LPG ガスが普及, 米価は 50 年で約 25~30 倍の上昇し, 水田の地価は 50~60 倍に上昇した。村内雑貨店は, 5 店から 10 店に増えている。

また, スケジュールド・カーストに関する教育の進展は目を見張るものがあり, ネルー記念カレッジの学生数の半数以上はスケジュールド・カースト出身であり, 高い学位を得るものも増えている。さらに, 村長や議会の議長といった要職をスケジュールド・カーストの女性が務めるなど, 躍進が続いている。教育が下層住民の地位向上の出発点となっているのである。

50 年間変わらなかったこととしては, 異カースト間の通婚事例が見られないこと, カースト単位に居住区が定められていること, シュードラの長老による村内裁判の慣行, マレーシア, スリランカ, シンガポールと交流, その他のヒンドゥー・スケジュールド・カーストの階層構成と相互扶助が指摘された。

最後に, 長年にわたるアビニマンガラムへの参加型調査の印象として, 村外・県外・州外・国外との経済関係が, 村内の社会的な地位と消費水準を決めるということ, また, 農業従事者の地位が低下し, 農地の不動産価値への関心が高まり脱農化が進んでいることを指摘した。また宗教の面で, アンベードカル信奉から仏教復興運動へのシフトが行われていることに注目し, 仏教への関心の高まりとともに寺院建設が進んでいることを紹介した。

【議論の概要】

若原氏は, 南インドのスケジュールド・カーストと仏教との関係性について質問し, 報告者からは, 仏教復興運動は主にスケジュールド・カーストが担ってきたが, 政治的・社会的な要因から, 今後の復興運動は特定のカーストに限定されなくなるのではないかと



という指摘がなされた。またフロアーからは, スケジュールド・カーストの高学歴化がなぜ起きているのかという質問がなされ, それに対する答えとして, 奨学金が得やすいことが要因の一つとして挙げられた。報告者はさらに, 今後も彼らの高学歴化は進むと思われるが, 彼らが優遇されることに対する反発が出てくることが予想されると述べた。



2013 年度 第 7 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目：ガンディーとジャイナ教，その思想交流
- 開催日時：2013 年 10 月 12 日（土）15:00～17:00
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者：藤永 伸（都城工業高等専門学校教授，ジャイナ教研究会代表）
- コメンテーター：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授，BARC センター長）
- 参加者：22 人

【報告のポイント】

インド建国の父ガンディー（1869-1948）と密接な関わりのあったジャイナ教徒が紹介され，ガンディーの思想形成におけるジャイナ教の影響，またガンディーの活動に対するジャイナ教徒の反応が明らかにされた。ジャイナ教の専門家によるガンディー研究は未だ本格的になされておらず，今後の研究の先駆けとなる報告となった。

【報告の概要】

まず，ジャイナ教に関する基礎知識が説明された。現在，ジャイナ教徒は 500 万人程度で，インドの人口 12 億人中の 0.4%ほどのマイノリティーであると言える。教義上，商業面や文化面で生活を営む者が大半であり，裕福な者が多いことでも知られている。

約 2500 年前にガンジス川中流域で活動したマハーヴィーラは，「不殺生・不妄語・不偷盗・不邪淫・不所有」という行動規範を定めた。特に「不殺生」つまり「生き物を殺害しないこと」は，ジャイナ教の教義を特徴付けるものとして知られている。ジャイナ教で言うところの「生き物」とは，可動者・不動者・水・火・地・風であり，水や火も命を持つと考えることから，動植物のみならず，水や火の殺害にも注意しなければならない。また，「不所有」は「ものを持たないこと」であり，マハーヴィーラは出家後 2 年で，全ての着衣を捨て，裸形を続けた。その後，ジャイナ教徒は衣類をまとわない出家者（空衣派）と着衣を認める人々（白衣派）に分かれることとなる。「不殺生」「不所有」を標榜するジャイナ教徒は，その教義に基づきしばしば断食を慣行し，断食死が理想的な末期とされる。

マハーヴィーラ以後のジャイナ教は，ガンジス川流域からインド亜大陸全体へ拡大し，特に西インド（現グジャラート州カティヤワール半島）に多くのジャイナ教徒が集い，ヴァラビーで西暦 5 世紀に白衣派聖典結集が行われた。西暦 12, 3 世紀のヘーマチャンドラとクマラーパラー王に代表されるように，グジャラート，ラジャスターン州でジャイナ教が社会的に重要な役割を果たした。また，イスラム教支配下においては，商人として西インドで重要な役割を担った。西暦 18 世紀以降，社会的勢力も衰え，教団内部でも正式な出家者が少なくなり，半僧半俗の集団が主導権を握った。

ガンディーは，インド西部カティヤワール半島ポールバンダルのヒンドゥー教の家庭に

生まれるが、後に「建国の父」と称される若きガンディーの思想形成にジャイナ教が影響したことは、あまり知られていない。ガンディーは自伝の数ヶ所でジャイナ教に言及し、イギリス留学直前の 1888 年以前と、インド帰国後南アフリカ移住の 1893 年前後においてジャイナ教徒と交流があったことを述べている。まず、ガンディーはイギリスに留学する前のこととして、「ジャイナ教の僧侶らもしばしば父を訪問していたし、ジャイナ教徒ではない我が家から乞食を受けていた。また父とは宗教的な話題も世俗のことも話していた」（自伝 p.24, 全集第 44 巻 p.116）と述べており、ガンディーの家にジャイナ教徒が出入りしていたことが伺える。また、留学の際のエピソードとして「ベチャルジー師は本来モードヴァニヤの出であったが、当時はジャイナ教の出家者になっていた。ジョーシジーと同様に我が家の助言者であった。彼は私に加勢してくれて、こう言った。『この子に誓いを三つさせよう。そうすれば行ってもいいだろう』と。彼が誓戒式を取り仕切り、私は酒と女性と肉に触れないことを誓った。これを行ったので、母は許可をくれた」（自伝 p.28, 全集第 44 巻 p.121）と述べ、ガンディーの留学の際にジャイナ教徒ベチャルジーの力添えがあったことを伝えている。

ガンディーに影響を与えた彼の同時代人に、トルストイ（1828～1910）、ラスキン（1819～1900）と並んで、ジャイナ教のラーイチャンド（1867～1901）がいる。ラーイチャンドは、ヒンドゥー教徒の父親とジャイナ教徒の母親の間に出生し、幼児期から秀才として名を馳せていた。宗教的な洞察力と表現力を有し、20 歳になるまでに多くの著作を著す。宝石商を営みながら、瞑想によってアートマンの本質をつかむ修行を実践していた。在家者中心の宗教活動の流れを汲み、神秘主義的傾向を引き継いでいた。ガンディーとの約 10 年間の交友は、多くが手紙のやり取りであった。「これまで多くの宗教指導者や説法者に会ってきたし、色々な宗派の長に会おうとしてきたが、ラーイチャンドほどの印象を与えた者はいなかった。彼の言葉は私の心に響いた。その知性とまじめさには大いに尊敬せざるを得なかったし、深く確信したのは彼が決して私を迷わせる事はないし、奥深い思想を明かしてくれているという事であった。それゆえ、精神的な危機に陥った時は彼が拠り所であった」（自伝 p.65, 全集第 44 巻 p.157）というようにラーイチャンドに対する尊敬と信頼を告白している。あるときガンディーが「もし、蛇が私をかもうとしているとき、取るべき唯一の対処法として噛まれるままにすべきか、それとも殺してしまうべきか」と問うたのに対してラーイチャンドは、「蛇に噛まれるままにすべきだと答えるのは躊躇されます。しかし、身体は消滅する事を理解している貴君にとって、何の価値もない体を守るために、それに執着している動物を殺すのは正しいことでしょうか。精神の豊かさを求める者にとって、そのような状況では身体を滅びるがままにしておくのが最善です。しかし精神の豊かさを求めない者はどうすべきでしょうか。これに対して答えうるのは<地獄などを経験するであろう、つまり蛇を殺すであろう様な人物には何も助言できない>ということです。アーリア人的文化を持たない人には蛇を殺せと助言できるでしょう。しかし、貴君にせよ小生にせよそのような人間であることなど夢にも思いたくないですね」（全集第 36 巻 p.509）

と答え、ジャイナ教の教義に基づいた返答をなしている。また、ラーイチャンドはジャイナ教関連の書籍をガンディーに送っており、ガンディーが1922年以後の監獄においてジャイナ教の聖典を読んでいたことが知られている。

このようにガンディーはジャイナ教から多くのことを学びとっていたのである。では反対に、ガンディーはジャイナ教徒に対してどのような影響を与えたのであろうか。ガンディーと活動をともにした人物の一人として、ジャイナ教の出家者であるジナヴィジャヤ（1888～1976）がいる。彼は、国民運動への積極的参加を決心し、ガンディーとアーメダバードへ赴き、グジャラート・ヴィドゥヤーピーット古典学部門教授として活動した。1928年にヨーロッパ游学し、西洋の研究方法を学び、所見をガンディーに報告し、1929年末インドに帰国。翌年ガンディーの要請で「塩の行進」に参加し逮捕され、ナーシクの牢獄に収監された。また、伝統的な方法で教育を受け、属する宗派の聖典を研究する在家者（パండిット）としては、ベチャルダース・ドーシー（1889～1982）が挙げられ、1930年にガンディーが「塩の行進」で逮捕された際に、グジャラート・ヴィドゥヤーピーットの雑誌「ナヴジヴァン」の編集を引き継いだことが紹介された。

最後に、今後の課題として、パండిットが残した論文研究、ジャイナ教の多元主義を示す「アネーカーンヴァーダ」というアイディアとガンディーの思想の比較、不殺生思想具体化としてのパンジャラポールの設立と運営の分析、ジャイナ教の一般在家者に与えたガンディーの影響の考察が挙げられた。

【議論の概要】

桂氏からは、ジャイナ教徒であり、古典インド学を担った近年の著名な研究者の背後に、インド文化の独立性を主張したガンディーの影響が見られるという重要な知見が得られたというコメントが寄せられた。また、課題として挙げられたジャイナ教のアネーカーンタヴァーダに関して、真実を表現するための多元的な方法を許容するジャイナ教の立場が、ガンディーと連関を持つのかを明らかにする必要があると指摘した。フロアからもこの点に関する期待の声が聞かれ、ガンディーの思想を理解する上で重要な「多様性」が、ジャイナ教のアネーカーンタヴァーダを基盤にしている可能性が指摘された。報告者からは、ガンディーはアネーカーンタヴァーダを『スヤードヴァーダマンジャリー』から学んでいたのではと述べた。桂はさらに、多元主義という立場は現代インドを理解する上で重要であることを付言した。



2013 年度 第 8 回 ユニット 1 (南アジア地域班) 研究会

- 報告題目 : Why Ashoka (and therefore the Buddha) should be older than we take him (/them) to be.
- 開催日時 : 2013 年 11 月 18 日 (月) 17:00~19:00
- 場所 : 龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者 : Ashok Aklujkar (Professor Emeritus, University of British Columbia)
- コメンテーター : 桂 紹隆 (龍谷大学文学部教授, BARC センター長)
- 参加者 : 31 人

【報告のポイント】

アショーカ碑文を斬新な視点から検討することによって、アショーカ王の年代の見直しを促した。碑文がアショーカ在世当時に作られたとは考えられないことを主な理由として、アショーカはこれまで想定されていたより古い時代の人物だったのではないかという可能性を指摘し、アショーカ王の即位年代が基準となって導きだされる仏陀の年代に対しても示唆を与えた。

【報告の概要】

冒頭で報告者は、インドに関する年代を古くしようとすると、ナショナリズム的な主張だとされる場合があるが、報告はあくまでファーストソースに基づいて議論を構築しており、インド古典学における全うな手順を踏んでいることを断った。そしてアショーカの年代論に関する研究史を紹介し、アショーカを従来の説より古く見ようとする研究も散見されることを確認した。特に K.D.Sethna が提唱する年代論が紹介された。

アショーカの年代を考えるのに必要な 3 つのソースとして、上座部の資料、プラーナ、そしてインド以外の中国などの伝承が挙げられた。特にプラーナに関しては、これまで有力な資料として用いられてこなかったが、プラーナの中にインドの歴史を見いだすことができる」と指摘した。また、西洋的な目でインドを見ること、つまり「史書なきインド」というイメージでインドを捉えることは問題であることも付言した。また、Kalhaṇa の *Rāja-taraṅgiṇī* によると、アショーカは約紀元前 1000 年の人物となるが、そのような記録が無視されていることに疑問を呈した。

また、アショーカ碑文に関して、碑文が刻まれた当時、その地域の人たちはその文字を読むことはできなかったのではないかという興味深い指摘をなした。近年になりイギリス人が解読に成功し、その内容が明らかになったのであり、宗教的な差別をしないこと、動物に対する哀れみなど、そこに著された高貴な理想は、今日に至るまでインドの歴史文化に影響を与えていると述べた。

アショーカ碑文の問題点として、同じ文言が繰り返し書かれていること、ブラフミー文字で統一されていることが指摘された。アショーカ碑文には、摩崖法勅、小摩崖法勅、石

柱法勅という区別があり、摩崖法勅は市民一般に向けて、後の二つは仏教徒対象と見なすことが出来る。碑文はインド亜大陸全土に見られるが、はたしてそれがアショーカの統治領域を示すのかという問題が提示された。報告者はアショーカ以降に、彼が伝説化する中でアショーカ碑文が作成されたと考えており、つまりアショーカはアショーカ碑文以前の人物であった可能性を指摘した。また「アショーカがカリング戦争において大勢を殺したから仏教徒になった」というエピソードは、一般に向けてのメッセージが刻まれた摩崖法勅には出てこないことも紹介した。

さらに、「アショーカ」という名前が小摩崖法勅の一部にしか出てこないことに注目し、「アショーカ」は後代の付加である可能性を指摘した。本来は、「神々に愛された者」を意味する「デーヴァーナンプリヤ」あるいは「良きものを見る者」という「プリヤダルシン」であり、アショーカはその後に成立した名前ではないかと述べた。

【議論の概要】

桂氏は、アショーカの年代論を検討するには、資料の一つとして中国の文献を用いる必要があるのではと指摘し、報告者は、インド内外の膨大な資料の中から信頼の出来るものを選びとる必要があると答えた。またフロアからは報告者の主張には吟味すべき箇所が少なからずあるとの批判がなされ、石柱に刻まれた文章にその元となるテキストが存在したのか、あるいは石柱法勅を他の法勅と区別しなくても良いのか等の指摘がなされた。最後に、この報告をきっかけにアショーカの年代論が再検討されることへの期待が寄せられた



2013 年度 第 9 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目：タイ仏教徒による環境保護運動の実態調査について
- 開催日時：2013 年 12 月 25 日（水）15:00～16:30
- 場所：龍谷大学大宮学舎白亜館 2 階共同研究室 1
- 報告者：本多 真（龍谷大学・相愛大学非常勤講師，2013 年度 BARC 公募研究員）
- コメンテーター：嵩 満也（国際文化学部教授，RINDAS センター長）
- 参加者：7 人

【報告のポイント】

タイの僧侶が主導する環境保護運動の実態調査に関する予備報告が行われた。方法論や先行研究の検討がなされ、タイの仏教者の社会問題への取り組みが紹介された。活動の事例として「木の授戒」が取り上げられ、ポスト世俗主義の立場から考察がなされた。

【報告の概要】

報告者は、「世俗／宗教」などの二分法を批判し、宗教の役割の変化をとらえる「ポスト世俗主義」という立場から環境問題を取り上げ、自然保護目的ではなく人間生活に重点を置き、力関係や抑圧の構造に対する批評を行うべきであると述べた。また、宗教が権力への疑問を感じないほどに深く主体を規律化することで、時に他者への苦痛の感受性と想像力が著しく欠落することへの注意を促した。

仏教と環境問題との関わりについては、1990年代に日本内外で研究が興隆し、主に倫理をめぐる議論がなされてきた。タイ仏教における環境保護運動については、ウィリアム・ダンカンの研究が紹介された。タイ仏教の環境保護運動は、タイ全土でさまざまな活動がおこなわれているが、全体像はつかめず、あくまで個別的に行われているようである。活動の特徴としては、仏教を基礎として経済効率とは異なる持続可能な価値の創出、抑圧された弱者・少数派に対する救済、また周縁部に住む人々の生活状況の確保が挙げられた。また活動と仏教教理との整合性が計られていることも指摘した。

次に、タイにおける環境保護運動の事例として「木の授戒」が紹介された。1990年代に、タイ北部の自然豊かなナーン州で森林伐採が深刻化していたことに反応し、「木の授戒」という運動が開始された。主導したのは、ナーン州出身の僧侶マナス・ナティープッタ師であり、木の授戒を行うことによって森林伐採を回避し、地元住民の生活拠点を保護した。活動は全国的な広がりを見せたが、現在は減少傾向にある。活動の動機としては、地元住民の生活や職業の確保、持続可能な地域の確立を指摘し、生活に苦しむ人のための活動であると述べた。木の授戒はチャイヤプーム州のカムキエン師、ヤソートーン州のジャワワット師などに影響を与えた。ポスト世俗主義からみた木の授戒の二つのポイントとして、シンボリックなアクションの流布によって、それがあたかも「仏教者による環境保護運動」として一般化したことと、周縁部に存在する活動との連関や相互性が見えにくくなったことが指摘された。後者に関しては、木の授戒そのものを否定するものではなく、彼らやその周辺に存在する人によって物象化された環境保護運動への先入観に批判が向けられると述べた。なお、木の授戒については、スーザン・ダーリントンの著書に詳しい。

今後、環境保護問題を念頭に置きながら、仏教（聖）／社会（俗）を超える異種混交的な（heterogeneous）関わり方を調査し、具体的には木の授戒の現地調査を進めると述べた。

【議論の概要】

嵩氏からは、報告者のタイ仏教徒の環境保護運動に対するアプローチが、エンゲイジド・ブディズムを研究対象としてきた BARC の取り組みと重なることを指摘し、相互に情報を共有し、研究をすすめるべきであるとのコメントが寄せられた。また出席者からは、タイの大学や、しばしば BARC で取り上げてきた International Network of Engaged Buddhists (INEB) などと連携を深めるべきであるとのコメントが寄せられた。



2013 年度 第 10 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

- 報告題目：仏教学者から見たアンベードカルの仏教理解
- 開催日時：2014 年 2 月 19 日（水）13:00～15:00
- 場所：龍谷大学大宮学舎清風館地下 1 階 B101 教室
- 報告者：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授，BARC センター長）
- コメンテーター：佐藤智水（龍谷大学客員教授）
- 参加者：22 人

【報告のポイント】

現代インドにおける仏教復興運動の中心人物であったアンベードカルが書き残した『ブッダとそのダンマ』は、しばしばブッダの教えとは異なる、アンベードカル独自の仏教理解として批判されて来たが、インド仏教研究者の眼から見て、細部の創造的な解釈を別とすれば、彼の理解はブッダの基本的な教義と矛盾するものではない。仏教を現代の科学的な思考と矛盾しないと捉えたアンベードカルの理解は、ブッダの縁起説の持つ合理性を考慮すると、的外れではない。

【報告の概要】

まず、ブッダの教えとその時代背景が概説された。ブッダが目覚めた真実の根幹は、この世のあらゆる事象は必ず何らかの原因によるという「因果律」（縁起）であり、ブッダの教えは、当時のインドを支配していた呪術的なバラモン教に対する一種の異議申し立てとして捉えることができる。そして、バラモン教とは違い、仏教は当初からすべての階級に開かれた宗教であった。ブッダの当時「六師外道」と総称される、バラモン教には批判的な宗教家・思想家たちがいたが、その中には業報説と輪廻説をともに否定するもの、業

報説は否定するが、輪廻説は認めるもの、両者をともに認めるものがいたが、ブッダ自身はジャイナ教の開祖のマハーヴィーラと同じく第三の立場をとった。両者の大きな違いの一つは、ジャイナ教が本来清浄な魂（ジーヴァ）が輪廻転生すると説いたのに対して、無我説の立場をとった仏教徒たちは永遠不滅の魂を前提としない輪廻説を展開する必要があった点である。

次に、インド仏教の盛衰と復興が略説された。農業中心の社会の支配原理であったバラモン教に代わる、仏教は新たな時代に相応しい宗教倫理として、王族（クシャトリヤ）たちの支持を得て、インド亜大陸全体に広まった。特に、マウリヤ帝国の第三代アショーカ王やクシャーナ王朝のカニシカ王の支持を得た。アショーカ王は各地に掲げさせた法勅に、バラモン教のダルマとも仏教のダンマとも異なる、普遍的な道徳としてのダンマを人々に勧めている。仏教をはじめとする非バラモン教諸宗派の優勢は、バラモン達に危機感を持たせ、自分たちこそ真のダルマを保持していると主張するようになり、膨大な量のダルマ文献が生みだされて行く。グプタ朝にもなると、バラモン教からの仏教批判は激しさを増し、やがて仏教はシュードラをはじめとする下層階級の宗教として弾圧され、インド亜大陸の中央部から姿を消して行った。イスラム教徒のインド侵入がそれに力を貸したことは言うまでもない。13 世紀になると、インド亜大陸の主要部分から仏教は姿を消すが、辺境地域ではしばらく生き延び、やがて 19 世紀末になってインド仏教再興の運動を起こすのは、仏教が生き延びたスリランカの仏教徒ダルマパーラであり、ビルマの出家僧たちであった。しかし、本格的な仏教再興の運動を起こしたのは、インドにおける階級制度の最下層に位置するダリット階級の出身であり、独立後のインド憲法の起草者であったビームラーオ・ラームジー・アンベードカルであった。

最後に、アンベードカルの仏教理解が検討された。700 年以上にわたって、生きた仏教の伝統がなくなっていた 20 世紀初頭のインドで、アンベードカルが接することができたのは、「書物の中の仏教」であった。ダルマパーラが創設した大菩提会の仏教僧やビルマから来た高僧たちとの接触もあったが、彼が晩年渾身の力を振り絞って書き残した『ブッダとそのダンマ』は出版後、上座部仏教の伝統教団からはブッダの教えに忠実ではないと厳しく批判された。アンベードカルの仏教理解を知るためには、彼が 1954 年 10 月の改宗時に表明した「22 の誓い」を検討するのがよい。そこには、ブラフマー・ヴィシュヌ・シヴァをはじめとするヒンドゥー教の神々への信仰と儀礼との否定が述べられ、平等主義が唱えられ、八正道・十波羅蜜・五戒・智慧・戒律・慈悲という仏教の徳目の実践が誓われ、最後に差別主義のヒンドゥー教を捨てて、仏教徒として生まれ変わることが宣言される。ここには、特に仏教教義に反するものは見られない。『ブッダとそのダンマ』に眼を転じると、ブッダの出家の理由や四諦の解釈にユニークな点が見受けられるが、アンベードカルの仏教理解は、伝統的な理解と大きく違うものではない。最も重要な分岐点は、過去世からの業果を認めるか否かであろう。

改宗後、時を経ずに亡くなったアンベードカルは、「自由・平等・博愛」の精神に貫かれ

た理想社会を実現するためのモデルとなる仏教教団を構築することはできなかったが、佐々井秀嶺やローカミトラ、サンガラトナやボーディダンマたちによって彼の理想は引き継がれ、ブッダの教えは現代インドのダリット仏教徒たちの間に燎原の火のように広がっている。

【議論の概要】

佐藤智水氏は、自身が1980年代から続けてきたダリット仏教徒との交流の歴史を簡単に語ったうえで、彼らがブッダとアンベードカルによって生きる意味を与えられたと述べたことは、中国に仏教が入った時に一般民衆が感じたことと共鳴すると指摘した。さらに、ブッダが内面的な苦の解決を説いたのに対して、アンベードカルは目の前の人々の苦しみを直視することを説いたと述べ、彼の仏教理解には大乘仏教の菩薩像が大きく影響していることを指摘した。

宮治昭氏は、アショーカ王だけでなく、「ブッダ」の名前が刻まれたコインを発行したことで知られるカニシカ王の仏教との関わりについてもさらに研究される必要があると指摘した。

入澤崇氏は、ベトナム戦争中、エンゲイジド・ブディズムが起こる契機となった焼身僧がアンベードカルのことを知っていたのかという問題提起をし、アンベードカル改宗の地であるナグプルの名前（ナーガの都）に象徴されるように、仏教とナーガとの関係が深いことを指摘した。

岡本健資氏は、アンベードカルが是認した仏教教義の合理性・科学性は、近代科学のもたらした負の側面を考慮すると、再検討される必要があるという問題提起をした。



〰〰〰〰〰〰〰〰